

(5) 小麦の収穫と雨－道産小麦は雨との戦い！－

北海道の小麦の収穫期は、通常7月下旬から8月上・中旬で最も温度が高い時期にあたります。降雨がなければ、小麦の収穫にとって最適な条件となります。しかし、梅雨のない北海道の真夏でも、太平洋高気圧の勢力が弱い場合には、オホーツク海高気圧の影響で低温・多雨となり、穂発芽の発生につながる場合があります。

穂発芽の発生は、北海道の小麦作安定上大きな問題となっていますが、中でも昭和51、52年の連続した被害は忘れることができません。この時期は、小麦の作付面積が急増し、大型コンバイン・乾燥施設の体系が普及し始めた頃で、全国的には道産麦の国内産麦に対するウェートが高くなり、道産麦が注目されるようになりました。しかし、この被害により大量の規格外品を出すとともに、規格内品の中にも低アミロ（アミログラムの最高粘度が低い）小麦が多く、実需者から道産麦の品質改善を、強く求められるきっかけとなりました。

この穂発芽とは、一体どういうものなのでしょうか？ 種子植物の生活環を発芽→登熟→休眠→発芽からみますと、多くの植物は登熟後ある休眠期間を経て、通常の発芽へと移行します。休眠とは種子が形態上成熟したとき水分、温度などの発芽に必要な最適条件を与えても、発芽しない現象をさします。

一般的には成熟後の種子は、ある期間発芽をしません。休眠期間を有しない品種、あるいは休眠が弱められた状態の時は、発芽条件が与えられれば、収穫前に立毛のまま発芽することがあります。これが、“穂発芽”というものです。

穂発芽の発生は、休眠との関わりが深く、環境条件によって大きく左右されます。休眠は、登熟後期から形成され、登熟後期の温度条件が高いと、休眠は浅く形成されます。また、発芽に必要な条件を与えた場合、温度が低いと休眠が打破され発芽しやすくなります。

このことから、北海道での穂発芽の発生と環境条件を考えた場合、登熟後期は、真夏の高温により、穂発芽耐性は弱められる形になり易く、さらに降

雨時の低温は、より発芽し易い条件となるため、穂発芽の発生には、好適な条件となり、欧米の小麦主産地からみると、小麦の適地とはいえません。

このような収穫期の悪条件の中で、穂発芽の発生を未然に防止できるのでしょうか。穂発芽の難易には品種間に差があり、秋まき小麦では、穂発芽しやすい「チホクコムギ」から早生・耐穂発芽の「ホクシン」が、春まき小麦では、府県品種並の穂発芽耐性をもっている「春のあけぼの」が育成されました。しかし、穂発芽の発生は、環境条件に左右され易いこともあり、十分な耐性にはなっていないようです。さらに高度な穂発芽耐性をもった品種育成への、果敢な挑戦が続けられています。

また、穂発芽の発生と収穫の関係では、収穫時期が遅れると雨に遭う機会も増え、さらに成熟期（粒水分約40%）後、日数を経るにしたがって、品種の穂発芽耐性は弱められることから、穂発芽の危険性は増大します。数日の収穫の遅れが、明暗を分けることにもなりかねません。穂発芽の発生を最小限にくいとめるためには、適期は種、雪腐病防除等により、穂揃いのよい小麦にして、成熟期後できるだけ早く収穫を終えるようにして、収穫・乾燥を効率的に実施することが重要となります。生産現場では、乾燥能力をアップするために、ビニールハウスなどを利用した“実干し”や二段乾燥など、欧米にはない、北海道型の収穫・乾燥体系が実施されています。

まさに、“道産小麦は雨との戦い！”、収穫期の条件が悪い北海道ならではの、工夫が取り入れられ、悪戦苦闘の中で、収穫作業は進められているのです。

＜土屋 俊雄＞